

未定稿

※第2回委員会までの意見で整理

平成25年度淀川水系流域委員会
第3回地域委員会
資料-4

平成25年度 淀川水系流域委員会【地域委員会】 淀川水系河川整備計画に基づく事業等の進捗点検に関する 報告書に対する主な意見

淀川水系河川整備計画について、危機管理・治水・人と川とのつながり・河川環境・利水・利用・維持管理の各分野において、平成24年度の進捗状況について、点検を行った。主な意見は以下のとおり

◎進捗点検の方法や指標に関する主な意見

◆危機管理分野

・勉強会、マイ防災マップ作りなどは現在の消防団の機能を担い得る様々な対象者が考えられる。例えば女性や子供が担える機能など、役割を細分して地域で分担して消防団の機能を補完しあうという考え方もある。また、評価の際、誰に対してどのようなプログラムを提供し、何をできるようになったのかを言及できるのではないか。

◆治水

・天ヶ瀬ダムの堆砂について、計画堆砂量などの情報も入れていただくとわかりやすい

・自治体で進めていることも必要に応じて、参考的に記載すると全体の状況がわかりやすいこともある。

◆河川環境

・河川レンジャーの活動として、外来種駆除を実施しているところもあるので、事例として示して欲しい。市民参加の実績（駆除状況）を参考資料にでも示してもらえると、活動の力にもなる。

・淀川の干潟・ヨシ原の現状が見えない。どのようなところにあって、どのようなところで再生をするなどの全体像があるのが前提。

・イタセンパラが生息できる環境を整備していくことを目指しているのであれば、イタセンパラが戻ったワンドは何が良かったのか、生息環境がどう回復したのかを評価し、次の取組に活かす方法を検討して欲しい。

・イタセンパラは淀川の生物多様性の象徴種であり、野生復帰に向けたプランの中で現状の評価と取組の目指すべき方向は示している。8年ぶりに成魚まで成長した環境というのは淀川本来の環境が一部の地域に再生できたと思っており、今後明るい兆しが見えてき

た。

・瀬田川洗堰操作については、琵琶湖環境への影響緩和の観点のみから評価されているが、産卵と洪水期前の水位低下が重なると、放流量の増量や下流高水位継続の長期化につながる。下流への影響も考えて柔軟な対応も必要ではないか。

◎事業実施に関する主な意見

◆危機管理分野

・災害時に早く要援護者を救出、避難させるためにも、要援護者への対応について、自治体との密な連携、事前検討をお願いしたい。

・作成したマイ防災マップを要援護者である障害者や一人暮らしのお年寄りなどにどのように伝達、周知していくかその方法や体制整備について検討すべき。

◆治水

・大きな出水後は、例えばダムの効果など治水について、地元の住民や首長などにきちんと説明すべきであり、また積極的に情報発信していくべきである。

◆人と川とのつながり

・アンケートでは、アンケートに答えた人自身が気づいている主観的なことしか把握できない。客観的にみて「協議会や河川レンジャー活動によって何か議論し始めた」など地域で何かが起こったときにそれをキャッチするような体制が必要ではないか。

・河川レンジャーの継続性の大切さと更新による多様性の必要性の両方が生かされるよう仕組みが望ましい。

・事業の実施に向けた早い段階から市民と一緒に川づくりワークショップ等ができれば、事業後の維持管理にも市民自らが積極的に取り組めるのではないか。

・河川レンジャーは地域に分かれて活動をしているが、上下流を含めた水系の全体像を議論する会合が必要ではないか。

・小径はハード整備だけでなく、ソフト面をいかに充実させるかという視点も必要。

・クリーン作戦は住民が川にふれあういい機会でもあるので、さらに参加者を増やすためにも回数を増やしたらいいのではないか。

・小径の整備においては、初期段階では河川レンジャーが地域の声や価値観を把握し、行

政に伝える役割を担うが、河川レンジャーを介さなくてもうまく地域のニーズを行政が把握できる仕組みができることが望ましい。

◆河川環境

・次世代を担う子供の育成は非常に重要である。現代の子供は川の良さをあまり知らない
ので、良さを気づかせることが大事。環境教育等の実施回数がH21年度をピークに減っ
てきているので、もっと取り組みをお願いしたい。

・淀川における希少種や外来種の状況を把握し、目標や課題を整理し、全体像を示した上
で、重点施策として「イタセンパラを野生復帰させる」、「どの外来種を駆除する」とい
う戦略をたてないといけないのではないか。事業だけが先行しているようなイメージを受
ける。

・ナカセコカワニナの調査や移植などの現場作業を子供や市民に体験してもらうことは大
事。